

多機能静穏域磯根資源調査（定着性資源）

（要 約）

山田 嘉暢・桐原 慎二

目 的

深浦町北金ヶ沢地先に設置された多機能静穏域におけるウニ、サザエ、ナマコ、海藻など定着性資源の状況を把握し、施設の効果的利用方法を検討する。

材料および方法

平成18年6月15日と平成19年2月14日に、それぞれ多機能静穏域内の投石漁場内にある5地点および離岸堤にある1地点の計6地点に潜水し、海藻や底生動物の生息状況を観察した。また投石漁場では、海藻を50cm四方の枠、底生動物を1m四方の枠でそれぞれ2枠分採取し、種ごとに湿重量を測定した。離岸堤の調査地点では、海底面部分について幅1m、長さ20mの範囲にある底生動物を採取し、同様に測定した。平成19年1月25日に、投石漁場でのエゴノリ増殖を目的に、西側調査地点にあるホンダワラ群落中に、湿重量250gのエゴノリ果胞子体をカルボスポアーバッグに入れて設置した。

結果および考察

(1) キタムラサキウニ

キタムラサキウニは、6月の投石漁場では1.5個体/m²、（生息量95.7g/m²）、2月は1.0個体/m²（同117.8g/m²）が観察され、19年2月（2.0個体/m²、129.6g/m²）に比べ生息密度が減少したが、個体が大型に成長したため生育重量では増加した。

またキタムラサキウニは、底生動物の中で最も生息量が多く、各調査で底生動物全体の44.0-53.2%を占めた。

身入りは、6月には、最大19.2%、最小4.9%、平均14.0%あって、前年8月調査の平均16.2%に比べ、2.2%減少したが、販売水準に達していた。投石漁場における2月のキタムラサキウニの資源量は、平均生息密度からは、1.5トンと計算された。これは本調査を開始した16年度以降の推計値と概ね一致しており、資源量は安定しているといえた。

キタムラサキウニは、殻径の平均は5.4cmであって、前年調査の5.1cmに比べ0.3cm増加した。また漁獲の目安とされる殻径5cmを上回る個体は、全体の93.6%に達し、前年の77.6%に比べ、多くの個体が漁獲サイズに達したことが判った。一方、0-1齢とみなされる殻径3cm以下の個体は枠取り採取されなかったが、潜水観察中に生息が確認され、多機能静穏域においてキタムラサキウニが自然発生していると考えられた。

キタムラサキウニは、投石漁場の中央の調査地点に多くみられ、海藻が多く生育した東西では1個体/m²以下であった。離岸堤部分では、6月の平均殻径と身入りがそれぞれ5.7cmおよび9.5%であって投石漁場よりも大型であるが、身入りは劣った。

発表誌：平成18年度青森県水産基盤整備事業多機能静穏域関連調査（定着性資源）報告書。青森県水産総合研究センター増養殖研究所，平成19年3月。

(2) サザエ

サザエは、6月の投石漁場で0.1個体/m²、18.4g/m²、2月には0.2個体/m²、16.9g/m²が見られた。前年の8月(0.4個体/m²、33.1g/m²)および2月(0.2個体/m²、17.2g/m²)に比べ、生息密度がさらに低下した。投石漁場におけるサザエ資源量は、6月の生息量からは239kg、2月の結果からは220kgと計算され、前年2月の226kgとほぼ同じ水準で、平成15年以降にみられた斃死以降、資源量がまだ十分に回復したとは考えられなかった。

(3) マナマコ

マナマコは、6月の投石漁場では0.3個体/m²、62.1g/m²、2月には0.5個体/m²、55.8g/m²であった。前年8月(0.4個体/m²、57.0g/m²)および2月(0.9個体/m²、91.2g/m²)に比べ生息密度、量ともやや減少した。6月の生息量から、投石漁場での資源量は807.3kgと計算された。

またマナマコは、昨年8月には離岸堤の壁面と砂層の境界部分には認められたが、6月には観察されなかった。2月には0.2個体/m²、47.9g/m²が観察された。離岸堤の長さが400mあることから、そこでのマナマコ資源量は、95.8kgと計算された。したがって、投石部分と合わせて、約903.1kgの資源があると考えられた。

(4) 藻場と海藻

海藻は、6月の投石漁場ではホンダワラ類5種(マメタワラ、ヤツマタモク、フシスジモク、アカモク、ヨレモク)にエゴノリとケウルシグサ(褐藻類)など計11.6kg/m²、2月にはホンダワラ類3種が751g/m²観察された。

このうちヨレモクは、6月には海藻全体の12.5%に相当する1,446g/m²、2月には71.3%に相当する535g/m²が生育し、海藻類の中で卓越した1種であった。またヨレモクを含むホンダワラ類は、投石漁場の東西側の調査地点で751-9,461.6g/m²とよく繁茂していた。